資料紹介

『三十六番歌結』

中山　成一

表紙（左上）「三十六番歌結」

初冬山嵐

一番

左　　信親

冬来ぬと山は嵐の音さえて時雨をいそく気色成かな

右　勝　　維足

夕こりの雲にひゝきて冬の来る音すさましき山おろし哉

左哥、初冬のさまさるものには聞なされ侍れと、為家卿の此けしきといへる詞すへてよむへからすといましめ給へるは、此哥のことく末かれにせんかたなく聞ゆるによりてなるへし。心してつかふへきにや。右哥は本末たちろくかたなくいとよくよみおろされたれは、

夕こりの雲たちまよひ吹しきる風のひゞきはたかくきこゆる

とや申へからむ。

時雨雲

二番

左　勝　　古水

行秋を惜みしはてや神無月晴ぬしくれの雲と成けん

右　　広雅

神無月雨もしくれと名をかへて雲の行来のしとろ成哉

此つかひいつれもをかしうよみなされては侍るものゝ、右のかたいさゝかことしけきやうにや聞え侍らん。

秋をしもをしむ心の立そひししくれの雲そあはれ也ける

落葉埋橋

三番

左　持　　千竹

とふ人もなき我門の板はしは落る木の葉に埋もれにけり

右　　妥喬

今朝みれは嵐やさきに渡りけん木の葉ちりしく山河の橋

里なるも山なるももみちのにしきをしきわたしたらんからにはたゝふまゝくをしうこそおもひたまへられ侍れ。

いつかたをとはかり人のまとふまてたれひとしへにかけならへけん

野分霜

四番　左　勝　安貞

みし秋の花野やいつらおしなへて霜に枯せぬ草の葉もなし

右　ゆふ

武蔵野の尾花も萩も枯果て只白たへに霜そ置ける

さしもひろからん武蔵野に尾花萩と二くさにかきられたる、其けしきをうしなふに似たり。

秋わけし面かけそひて置霜の花おもしろき野へにも有かな

蘆葉枯

五番　左　勝　清石

池水の底もさやかにみゆるまてあしの村立かれ果にけり

右　鶴年

難波江の蘆の青葉も枯にけりよな／＼結ふ霜にたへなて

右哥、末句霜にたへすてなといふへきにやとおほえ侍り。

難波江のきしにかれたつかれあしの末葉みたれてみえわたるかな

されは左の池水さやかなりと申へし。

屋上霜

六番　左　勝　穂主

寒さをもしらて雀のあさる哉朝霜しろき宿のひさしに

右　宗粛

小夜更て軒はの風のそよく也我すゝの屋に霜や置くらむ

此すゝのやはさゝふきなどいへることくすゝもてふきたるならんからにそよくとはいはるましくや侍らん。されは

朝またき風もさわかぬ軒に来てなくやすゝめの声のさやけさ

行路雪

七番　左　信親

ちりかゝる花とみるまて玉鉾の道行そてに雪そふりくる

右　勝　広雅

此まゝに行てもみはや三輪か崎佐野のわたりの雪の気色を

左哥、る文字おほく耳たちてこそ聞え侍れ。右は、古哥のすかたありてたけたかく、又けしきといへる詞も一番の左にはたかひてよくつかひなされたり。

もろともにいさ／＼われも行てみん雪おもしろき佐野のわたりを

竹亭聞霰

八番　左　持　古水

竹むらにおくまる宿をなくさめてけふも音する玉あられかな

右　妥喬

ひとりすむ軒はの竹に音たてゝうきよかましく降あられ哉

此つかひさはかりの高下もみえ侍らぬにや。

立つゝく竹むらさやきふりしきる霰の音はきゝもわかたす

水氷不流

九番

左　勝　　千竹

流行小河の水の心をもけさは氷のとちはてにけり

右　　ゆふ

飛鳥河かはり／＼てふちは瀬にせは氷りにそとち果にける

左の小川さはるくまもみえ侍らす。右の飛鳥河はことはよとむかたにや聞え侍らん。

ふちせなき小河の水の一すちやとゝこほりなき流れ成らん

夕千鳥

十番

左　　安貞

こよろきの磯山おろしさえくれて氷るなきさにちとり鳴なり

右　勝　　鶴年

夕されはひらの根おろしさえ／＼て真野の入江に千鳥鳴也

こよろきのいそもみにしみては聞え侍れと、まのゝ入えのかた、ことに其実景みるこゝちし侍り。かの頼綱朝臣の衣手によこの浦風さえ／＼てこたかみ山に雪ふりにけりといへるおもかけありて、尤よろしき哥なるへし。

風わたる真野の入えにたつなみのなみ／＼ならぬ声とこそきけ

朝見水鳥

十一番

左　　清石

朝日さすかたや氷のとけつらんなみたちさわく池の水とり

右　勝　　宗粛

朝河に立おくれたる水鳥は上毛の霜に日影まつらし

左哥、朝日さし出て氷のとけわたらんに水鳥の所えて立さわくさまあしからすみえ侍れと、下の句ひたつゝきにつゝきて事きれ侍らぬにや。波に立さわくなといはまほしきこゝちす。右は、いまた人のおもひよらぬ趣をことよくいひつゝけられたる、いと手際ありと申へし。

中々に日かけまつとて水鳥の立おくれしやおくれさるらん

雪夜月明

十二番

左　　穂主

あひにあひて照こそまされ白雪の積る高根の冬夜月

右　勝　　維足

村雲は跡なくはれて山のはの雪をみかける月のさやけさ

左、冬夜の寒景かきりなくみにしみては聞え侍れと、ちかく或人の、あひにあひてさえわたる哉さゝの葉のさやくの霜よの有明の月といへる侍り。そをかすめられたるにはあらさめれと、今は憚るへきにやとおもひ給へられ侍れは、

久かたの雲ゐぬ山のしら雪をみかけるかたやてりまさるらん

鷹狩帰路

十三番

左　勝　　信親
ふる雪に帰る交野の道なれと今一よりはあはせてしかな
右　　妥喬
狩衣日もゆふくれに成ぬれはうちつれかへる小野の鷹人
右のかたは、あまりありのまゝにて哥とよみ出たるかひなきこゝちす。されは、
みゆきちるかたのゝみのゝかり衣たちこそとまれおのかこゝろに

河網代
十四番
左　勝　　古水
千鳥鳴田上河のあしろ守いく夜か霜におき明るらん
右　　ゆふ
河水に錦あろふとみゆるまて紅葉にかゝる瀬々のあしろ木
右哥、錦もてかされるものゝ中々にふりたるかたに聞なされてみたてなくや侍らん。
霜になくちとりの声をみにしめてあしろ守身やわひしかるらん
おちる心もおもひやられてあはれにこそ。

炭竈煙
十五番
左　　千竹
桜すみやくか煙もさなからにかすみてみゆるやまもとの里
右　勝　　鶴年
白雲に立そふ物はますみやく大原山のけふり也けり
左、めつらしとはかまへられたれと、右のしらへやすらかなるにはけおくれてや聞え侍らん。
かた〳〵にやくとはすれと大原の山の煙や立まさるらむ

炉火忘冬
十六番
左　勝　　安貞
冬籠る人の心をしはらくは春になしつる夜半の埋火
右　　宗粛
埋火のもとに寝覚てたとる哉ゆめにみえつる春のゆくへを
此つかひ、ともに意をかしうしらへやすらかにしてなみ〳〵の哥ともみえ侍らす。さるよろしき中に、猶よく〳〵おもひくらへ侍れは、しはらくは春になしつるなといへるわたり、ことに手際あるにやと覚え侍れは、おのか心のひくにまかせて、
しはしたによはのすひつをかきなてゝわれもこゝろをはるになしてん

梅告春近
十七番
左　持　　清石
やかてこん春のちかさを世に告て梅は早くも花咲にけり
右　　維足
今朝みれは隣の梅の咲にけり春も近くやならんとすらむ
左、二三の句、春のちかつきしをよにつけてとやうにいはまほし。右、二の句、梅のとあるの文字おたやかならす。梅そ咲にけるにてこともなかるへし。さる申むね侍れは、

右左となり間ちかき梅かゝはおなしほとなる匂ひなるらん

とや申置てむ。

寄日恋

十八番

左　穂主

いたつらに日の入をのみ待ち／＼て君をこひせぬ夕暮もなし

右　勝　広雅

くもりなく照日の影はへたてねと隔る中の袖そかはかぬ

左、二三句のつゝき、哥詞めかすや、夕日かけ入をまちつゝなともやいふへからん。又、こひせぬ夕くれとあるもいかゝに侍り、恋ぬとのみにて事たりぬへし。されはよろしと迄は侍らねと、

いかならんてる日のかけにかけてるにかはきもやらぬ袖のなみたは

左にはまさりぬへくや。

寄月恋

十九番

左　持　信親

いかなれはかたみに人目忍ふ身の月あかき夜も思い待らん

右　ゆふ

月影は我ためつらき人なくて詠るたひに袖そぬれける

左哥ともに人めをとこそいはまほしけれ。又、末句待らんとのみにてたりぬるを、さては文字たらぬかゆゑにしひておもひといへる詞をそへたるかと聞えて、いと／＼せんかたなくや。右、また我為つらき人にてもなきをとやうの意につゝけまほしうこそかた／＼申むね侍るにや。

月をみてまつもおもふももろともに恋のこゝろはかはらさるらむ

寄星恋

二十番

左　古水

君を我思ふおもひは天津星数も限りもしられさりけり

右　勝　鶴年

君こそは晴ぬ雨夜の星ならめ袖のみぬれてみるよしもなし

左哥、三四の間にの文字あるへきにやと覚え侍り。右は、本末ゆるきなくいひつらぬかれたる作意の手際もみえ侍るにや。

雲間なきあまよのほしのかきくれてまとふ心や悲しかるらん

寄雪恋

廿一番

左　勝　千竹

踏分てふりしゝ雪の跡よりや我かよひちはあらはれにけん

右　宗粛

出ていにし妻戸を明て詠れは跡さへきゆる野路の薄雪

薄雪にても跡はきゆへけれと、さはかり薄雪を取いてられたる詮ありとも聞え侍らす。されは、ふみわくるはかりの雪こそあとまきるましうなん。

朝またき八重ふりしきて薄からぬ心のほともみゆるゆき

かな

寄風恋

廿二番

左　勝　　安貞

風のこと我身のみえぬ物ならはとはにかよはん君かあたりに

右　　維足

君かすむかたよりかよふ夕風はこれをたにとて袖にしめつゝ

右哥、下のかたいと〳〵をかしうもてつゝけられたれと、夕風はとあるや、おたやかならす聞え侍らん。

一しきりたゆむ音たにきこえすは吹もたくれぬ風ならましを

寄雨恋

廿三番

左　勝　　清石

待人は月夜にさへもこさりしを雨晴なはと何おもふらむ

右　　広雅

終にかく晴ぬ思ひをいかにせん雨をかことに夜かれせしより

右もあしからすよみ出られたり。されと、月よにたにこさりし人をおもひあまりては、又恋したふこゝろのほと、さもこそといとかなしう身にしみてこそ聞え侍れ。

わすれては猶さりともとたのむこそわりなき恋の心なるらめ

寄露恋

廿四番

左　勝　　穂主

秋ならて袖にひまなく置露は思ひにしつむ涙也けり

右　　妥喬

はかなしや露の命のきえもせておきふし君を思ひける哉

右哥、はかなかしやと置たらんには末句君をおもふはなとうくへきにてこそ侍れ。左はさるふしもみえ侍らす。

よそにわかみるたにかなしいつとなく立しをれたる袖のなみたを

寄霧恋

廿五番

左　　信雅

いかにせん身は忍れと秋山の夕のきりの立やすきそを

右　勝　　鶴年

いかにして世にはもれけん夕きりの立のまきれに逢みし物を

左哥も申むねはみえ侍らねと、右哥の意をかしう詞いうにつゝけられたるには、夕きりの立およひかたくや侍らん。

中々によにはもれても夕きりの深くそみゆる恋の心は

寄煙恋

廿六番

左　　古水

みても尚なくさまゝしを立なひく煙は妹にこゝろ成せは

右　勝　　宗粛

我胸は浅間かたけにあらなくにもゆる煙をとかめられつゝ

左、猶とあることわりかなはさるか上に煙はといへるは文字もいかゝに聞え侍り。

みても猶それかあらぬかとはかりに覚束なくも立けふりかな

右哥も浅間の山のたかしとまては侍らねと、意はたしか也と申へし。

寄塵恋

廿七番

左　持　　千竹

諸人の行来をしけみ立塵のひまなく物を思ふころかな

右　　維足

我閨の塵はつもりにつもれとも君ならすして誰か払はん

左哥、道のさまなとあらはとおもひ給へられ侍り。おなしくは、人しけき市の街にたつちりのなとやうにこそあらまほしけれ。右、又つもれともとあらんには来てはらふ人もなしとやうにうくへきこゝちす。ともにおもふゝしなきにあらす。

かた／＼につもるもたつも世の間のちりはかはらぬ塵にさりける

夜過関路

廿八番

左　持　　安貞

鳥の音の偽もなき君か代は夜さへゆるす逢坂のせき

右　　広雅

硯きる音もさやけき月影の赤間かせきはよるもとゝめす

左右ともに今此安御代のさまあらはれて、いとよろしき持なるへし。

乱れたる昔の関のあとゝのみ聞わたる代そのとけかりける

隣家幽閑

廿九番

左　持　　清石

並ひすむ隣の人もいとふらんいたくな吹そ軒の松かせ

右　　妥喬

隣にも淋しとのみや思ふらん葎か奥はとふ人もなし

此となりすみの家、かた／＼おなしほとにみえ侍り。

一つらに軒をならへてすむ人の心やいかにしたしかるらん

海辺波近

卅番

左　勝　　穂主

浦近く家居しをれはよせ満る波を枕にきかぬ夜もなし

右　　ゆふ

難波かたきし打波は朝風のなきても音のたゆる間そなき

風のなきたる後も猶なきさによする音は、けにたえさるへし。されと、左のかた題意をわすれすよせかへるなみの音たしかなりと申へし。

敷たへのまくらにちかくよる浪の音にはさめぬ夢なかるらし

山家流水

三十一番

左　　信親

おのつから庭に流るゝ山水の清きを常に結ぶ菴かな
右　勝　宗粛
山里の垣根の小河ふちに瀬にいくかはりして世には出らむ
左哥もあしからねと、趣はいと〳〵ふるめかし。されは、
なかれてはうき世に遠き水上の其山さとやしつけかるらん
右の山にこそ住まほしけれ。

鶴声近枕
三十二番
左　持　古水
み島江の玉江の波に浮寝して枕にたつの声をきく哉
右　維足
冬枯のあしやの里に旅寝して枕にそきく友鶴の声
三島えあしや所はかはれとも、
打むれてこゝにかしこに鳴たつもいつれちとせの声ならぬかは

行路待人
三十三番
左　持　千竹
漕出す渡りの舟におくるともおくれし人をしはし待たなん
右　広雅
玉鉾の道の行手にやすらひて人待程そ久しかりける
おくれたらん友をうちすてゝゆかんは心なきにはなるへし。
此左右の哥の心にてこそ長き旅ちとも伴ひゆくへかりけれと、いと〳〵たのもしうなん。

またれしもまちしもともにおもふらんもつへきものは友にそ有ける

樵夫入山
三十四番
左　勝　安貞
山深く分入てこそ柴人の浮世をわたる道はありけれ
右　妥喬
奥山の岩越根越わけ入て賤はなけきをつまぬ日もなし
右、岩こえねこえとある、打あひ侍らぬにや、みねこえをこえなともやいふへからん。末のかたもなけきをこりつまぬ日もなしとあらは、意たしか成へし。左哥、山深く分入てもとやうにいふへきにやとも覚え侍れと、必山の奥にこそ柴人のみかよふ道はあるへきなれは、聞ゆるすかたも侍るにや。
君か代はしらぬみ山の奥にたにまよはぬほとの道は有けり
ともや申へからん。

旅宿暮雨
三十五番
左　勝　清石
やとりして夕の雨に思ふかなぬれてやこえんあすの山路は
右　ゆふ
淋しさのかきりとそきく旅にして日も夕暮の雨のしつくを
右哥、末句雨の雫とあらんには軒はなとのさまみえすは詮なかるへくや。左、下のかたぬれつゝこえんあすの山ちをとあらは、猶まさるへし。されとも、旅にあるほとかゝるをりは

たれも〳〵しかおもひわふることにて、其情をよくいひとられたりと申へけれは、いさゝかの難はさて置て、勝に定め侍り。

あすこえん山ちのうさをおもひつゝぬるよの雨やわひしかるらん

穂主　勝三　持一　負二

宗粛　勝三　負三

（野中烏犀圓文庫所蔵資料 B106）

松久友

三十六番

左　持　　穂主

子日せし明を思へは此松は誠にふるき友にそ有ける

右　　鶴年

なつさひてみれともあかぬ我宿の松は久しき友にさりける

此つかひともにいふへき難もみえ侍らす。

くらへては野へにたてるも軒なるもおなし友なる老木也けり

巳の刻はかりよりさるのさかりまてに判し終ぬれは、きゝひかめたるふしそおほからん。とみのわさなれは、さるかたにみゆるし給ひてよ。

霜月八日　　松根

信親　勝一　持一　負四　　維足　勝二　持三　負一

古水　勝二　持二　負二　　広雅　勝二　持二　負二

千竹　勝二　持三　負一　　妥喬　持三　負三

安貞　勝四　持一　負一　　ゆふ　持一　負五

清石　勝三　持二　負一　　鶴年　勝四　持一　負一